

「天地返しの一夜」を「連れ合い」と生きる人

遠藤一夫詩集『ガンタラ橋』に寄せて

一九九四年に、遠藤一夫さんから手紙をいただいた。敬愛する浜田知章さんに紹介されたといい、送られた詩誌「コールサック」の感想などが丁寧に書かれてあった。その手紙から溢れていたのは、大阪文学学校にも関係していた浜田さんを心から尊敬し、その詩的精神を充分に理解していて、飾りのない人間味のある文面だった。強面の浜田さんの真価や優しさを理解している詩人は少なく、私は信頼できる詩人を一人得たという、とても心強い思いがしたことを覚えている。それから以後、遠藤さんは「コールサック」に寄稿を続けているだけでなく、私と浜田さんが共有してきた詩誌運動の試みを理解して温かく直視してくれている詩人なのだ。

年譜によると遠藤一夫さんは、中学を卒業した後、故郷の郡山で家業の農業に従事していた。一九六五年の十八歳の春に家出をし、大阪の運送会社で働きながら、大阪文学学校夜間部に入塾して詩を学び始める。その年の暮れには福島に戻ったが、通信教育部やスクーリングなどに移って詩作活動を継続していく。遠藤さんにとってこの年の止むに止まれぬ、故郷を捨てようとした行為は、その後の遠藤さんの人生に大きな財産をもたらした。農家の長男で家業を継ぐことが宿命で

あるように育てられた遠藤さんは、両親や親族の期待を裏切つてまで、一生涯のやるべきことを発見しようと考えたに違いない。一年にも満たないで故郷に戻って行ったが、遠藤さんはその大阪文学学校での講師たち右原彪、田木繁、小野十三郎などの優れた詩人たちとの出会いと指導によって、彼らの詩的精神を豊かに反復し、自らの詩作に生かしてきたのだろうと想像される。その関係の中で詩誌「山河」創刊者である浜田さんとも出会っていったのだろう。

一九七三年に大阪文学学校の通信教育部が出した『文集1』には、二十七歳頃の遠藤さんの「飛べない鳥 二」という詩が収録されているので、引用してみる。

翼をひろげてみる

蒸し焼きのそれをむさぼる

以前 人は鳥目であった

腐魚をついばんだ鳥達もいつか

夜な昼な駆け回る

路地を抜けて僕は

鶏舎に入る

喉笛を斬る

産まない鳥を腑分けする

手際の周辺から霧が流れる

日本さくら草の群落が

山門付近の湿地にひろがる

廃寺跡に微笑んでいる

カドミウム汚染田では客土を急いでいる

遠来の客をもてなす手打ちうどん

里の実家では老鶏を汁にする

しなっこい肉片を噛みしめ

放し飼いの矮鶏を追ってみる

退路は一直線に球型を裂く

黄味がこぼれて孵化しない途を

フライパンで焼き朝餉にする

裏山に登ると海が見えるという

松木立の間から展がるのは盆地である

点在する村落から煙りがたち

暮らしが桑園に隠れている

桑の実を摘んだ麦秋が逝き

河原撫でし子がこぼれている

日夜不眠の市街地から追われた

公園工場の林間に茅蝋が帰ってきて

鶏舎の後に貸家が十戸

雌ん鳥と雄ん鳥がレタスをつついてる

（「飛べない鳥 一二」全行）

この詩は「研究科・詩・小野G」とある小野十三郎が指導するグループに収録されている。小野十三郎はこの詩に対して次のように寸評している。

まさしく詩の文体

遠藤一夫「飛べない鳥 二」 小野十三郎

とどこどころに、も一神経働かしてもらったら確実な表現ができただろうと惜しまれる箇所があるが、各センテンスのつながりは、まさしく詩の文体をなしていて、相当な力量を持っている人と見た。この鶏舎は状況が人間存在にかかわるところから生まれる不安の象徴だろう。喉笛を斬るとか、腑分けするとか、汁にするとか、球型をさくとか、そういう表現に、受け身の不安でない加害者のな作者の姿勢が感じられる。いい詩だ。

浜田知章さんはかつて小野十三郎が唯一の師であると私に語っていたが、遠藤さんも大阪文学学校通信教育で小野十三郎からこのような愛情ある指導を受けていたのだ。「まさしく詩の文体」とは遠藤さんの詩の魅力の特徴を言い当てている。また「受身の不安ではない加害者のな姿勢」という指摘も、遠藤さんの人間存在を見詰める強い精神力を見抜いてい

る。「人は鳥目であった」という一行は、はるか遠い古代の生命のつながりを想起させてくれ、夜に動き働くことを恐れた人間の知恵を詩に甦らせている。小野十三郎はなぜ「加害者のな姿勢が感じられる」と遠藤さんの発語の姿勢を一篇の詩から指摘しているのか。このことは、被害者のな場所について自己を断罪しない詩人達と遠藤さんは異なることを一篇の詩から直観したからだろう。小野十三郎は鶏舎を「不安の象徴」と言っている。鶏舎を作り出しその卵を産ませるために、昼夜を問わずに「喉笛を斬る／産まない鳥を腑分けする」ことに関わる遠藤さんの不安はとてつもなく大きかったのだろう。「飛べない鳥」である鶏の存在をいつしか自分自身の存在の在り方として我が身に引きつけている。人間が生きているために鶏や多くの生命の犠牲の上に立っていることを加害者として自覚化している。そして一九六〇年代の高度成長による公害による「カドミウム汚染田では客土を急いでいる」と時代の病巣を書き記している。そういったリアリズムに立脚し、自己を「飛べない鳥」と自己の置かれている場所を凝視しながらも、遠藤さんは「裏山に登ると海が見えるという」という詩的な想像力を抱え始めていったのだろう。その意味でこの詩篇は、家出をした十八歳の少年が十年近くをかけて辿り着いた新たな出発を記した重要な作品だったように感じられる。この頃地元の労働者詩人で後に詩集『鼻のアルバム』を出した久納正や木川保子と同人誌「衆」などを出している。この詩「飛べない鳥 二」は新詩集第二章に「飛べない鳥」として収録

*〈葦の地方〉 小野十三郎

86年5月

〔胡瓜の曲り角〕(全行)

この詩が書かれた書かれた一九八六年頃は、いわゆるバブル時代の真つただ中であつた。物作りを軽視し、不動産などが急騰した時期だつた。今は見直されてきたが、少し前までは曲がつた胡瓜は商品価値がないと言われ、市場にはほとんど出回ってなかつた。しかしかつては胡瓜は曲がつているのが普通だつたように思われる。日本人とはおかしなもので、胡瓜は真つ直ぐでなくてはならないと固定観念が出来上がる。と、曲がつた胡瓜は見向きもしなくなる。真つ直ぐな胡瓜はバブル時代の象徴だと遠藤さんは直観していたのだろう。小野十三郎が垣間見た葦原は、工場地帯に隣接する残された干潟であり自然でありながら、人間が生み出した環境破壊のただ中に残された聖地のような光景だつた。遠藤さんは自分が育てた「胡瓜の曲り角」からその時代の病んだ精神状況を垣間見ていたように思われる。曲がつた胡瓜を見ると日本列島の歪みを想像してしまい、ユーモラスを籠めた風刺をしていると感じられる。現在は農業の問題もあり、路地物の野菜も見直されて本来的な有機農法の在り方を良心的な農家は模索しているだろう。自然に曲がつた胡瓜などの恵みへの感謝を忘れてしまった、日本人たちの精神的な危機感を、遠藤さんはこの詩の中に暗示していたように考えられる。このような

されている。三十年前の詩であるが、少しも古びていない。手紙をもらった一九九四年に遠藤さんから五十頁にも満たないシンプルな詩集が届いた。毎月葉書一枚の「あいさつ詩」を親しい詩人たちに書き送っていたそうで、その短詩二十篇を集めたとのことだ。その記念すべき第一詩集が『葉通信』だつた。その中から詩「胡瓜の曲り角」を引用してみる。

病む事で肥えていった。
落した葉が地表を暖ため
胞子が割れ
適量の水と光さえあれば
事足りた明日もあつた。

病まぬ事で君と出会いた。
ぼくの係累にへばりつく
藻や苔類さへも
病む為に増殖した。

〈葦の地方〉をかい間みた
フラスコの中で
白い汚濁が澄みはじめ
スライス胡瓜が溶けてゆく。
あるいは列島弧。

詩が生まれるためには、大阪文学学校の講師たちからだけでなく、地元の農民詩人で煙毒公害を闘い、会津の農村や街や人々を詩集『農村十二月』で赤裸々に書き残した斎藤論吉にも生き方を含めて大きな影響を与えられたのだろうと思われる。

二〇〇〇年頃に遠藤さんは、大阪文学学校の夜間部で出会つた支路遺耕治（川井清澄）の追悼詩「黄金時代 惜別の唄」を詩誌「東国」一一一号に書いている。この詩は遠藤さんの青春時代への追悼詩のようにも読めるのだ。

〈みちのく郡山は風花が舞っている。／季節はずれの冬の旅がすりきれて／ぼくが曳きずり時に想い出す事もなくなつた／青春そして黄金時代は束の間の夢だつた。／悪い夢さえ見る事もない日々のぬくみに／ぼくはもう骨抜きになつてしまつたけれども／支路遺耕治あるいは川井清澄の／くぐもつた声は忘れない。／みちのく郡山で百姓をしている。／振り向けば三〇年前のぼくは居ない。／実在しない。夢の中でさえ君に出会う事は希わぬ夢だ。まぼろしだ。そうだ一九六〇年代後半、大阪文学学校夜間部、森の宮教育会館の二階か三階で、本科詩コースで同期したなんて。右原彪チューターにうながされて重い口を、くぐもつた声で何かを話した。忘れたな。古い話。封印したはずの何かがかしきみ、支路遺耕治伝説が生まれ、川井清澄が葬儀屋をしているらうわさは後年、研究科に再入学した時、風が伝え

た。変わらないな。何もかも。変わらないさ。君が居た事。かわらないな。居ない事も。／リトルガリバー社刊「幻のビート詩人」支路遺耕治・川井清澄読本を読んでいる。／決して語られる事のない文字、記号の森で、君の实在証明が一巻に編まれ路上に積まれ、誰かが踏みつけ、火を灯して暖をとるさ／考えてみた事があつたかどうかぼくは知らん、ぼくの詩は売れずしたがって野菜を路上に、週二回ならべ朝な夕な家内と二人で売りさばき／四人の子供を育て／見た夢の数ほど人生に退屈しなくなつたけど君と交差した青い日の事は覚えておくよ。／さようなら支路遺耕治。／小さな傷でしかなかった黄金時代が駆け足で足早やに去つた後、ぼくらはようやくに／安住の地に居をうつし、終のすみ家に／霊柩車を待機させ、温存する事で／日を積み、身体に塩をふく汗をしたたらせ／息絶える。／そして／君の画布にこう記す。／さようなら。

*支路遺耕治が『他人の街』を創刊する前、大阪で彼を見かけた。伝説以前の彼は好青年でシャイだった。記憶に誤りがなければ。文中、実名他非礼のくだり。多謝。〓

遠藤さんは一九六〇代から一九七〇年代にかけてビート系の詩人達で最も個性を放つていたと言われ、画家でもあつた支路遺耕治・川井清澄の存在を近くで見詰めていた。その生き方や詩作は異なるけれども、肩を並べ詩の教室で時代の熱

いたようだ。しかしそんな遠藤さんの秘めた思いを察してか、連れ合いである奥様やお子さんたちが一致して闘病中に遠藤さんに新詩集を勧めてくれたとお聞きしている。その意味で新詩集『ガンタラ橋』は家族から誕生を望まれ祝福されて家族の力で産まれた詩集なのだ。私は今年の二月に郡山に行き、遠藤さんの暮らす阿武隈川の支流谷田川の川辺を遠藤さんと話しながら散策した。遠くに会津磐梯山と安達太良山が見えるのを遠藤さんが教えてくれ、しばらく二人で眺めていた。遠藤さんがその光景をいかに大切にしている、憧れを持って日々遠望しているかが感じられた。また遠藤さんが精魂を傾けて作付けしているホウレン草畑やトマト畑のビニールハウスも見させてもらった。「寒じめをさせた郡山の野菜は、甘みが増してうまいですよ」と語る遠藤さんの素顔は、病を抱えながらも、誇り高く日々の暮らしに役立つ野菜を作り続けていて、とても清々しかった。新詩集『ガンタラ橋』の詩篇を紹介したい。

舟

前夜

自宅に帰りがつた。

影がぼくの夜を漆黒にし 眠れなかった。

気を共有した連帯感のようなものを抱き続けてきたのだろう。支路遺耕治は早く詩を捨て葬儀屋となって生涯を終えた。遠藤さんは詩を心の奥底に秘めながら「野菜を路上に、週二回ならべ朝な夕な家内と二人で売りさばき／四人の子供を育て」たのだろう。遠藤さんは支路遺耕治の死を知り、この詩を書き上げることによって、自らの限られた時間を自覚して詩作を本格化しようと決意したのではなかったか。支路遺耕治では書き得なかった、遠藤さんしか書き得ない「決して語られる事のない文字、記号の森」に挑み、遠藤さんの存在証明を果たすときが来たことを告げているよう私には感じられるのだ。

四人の子育てが終わり、細い糸を辿りながら、詩作の志を温めてきた遠藤さんは、ようやくそのエネルギーを集中できる時が到来したはずだった。しかし天は遠藤さんにまた大きな試練を与えたのだ。けれども遠藤さんは凄まじい闘病生活の中でも詩作を自己の始末書であり遺言のように書き記しているのだ。それが新詩集『ガンタラ橋』第一章の癌との闘いの日々である。また二章の故郷阿武隈川支流に拡がる風景で生き死んでいった友人、先輩詩人たちへの哀切感、自分を支えてきてくれた家族や、故郷への感謝を詩に託していったのだと思われる。

遠藤さんは、専業農家としての不安定な収入で家族を支えるために、詩歴は長いが本格的な自分の詩集作りを断念して

影だけが立っている。

存在する物達。物言わず

立ち尽くしたまま

彼岸に渡る舟を待っている。

立ち尽くしたまま

耐えよ！

此岸の万華鏡のような生地獄に。

遠くで犬がひと鳴き 遠吠えした。

彼岸が遠のいて行くように。

見知らぬ老人とならべた枕はなかったが

(お若いの) と声をかけられた気がした。

わしはのう 明日の朝 多分舟にのる。

(お若いの) ものは相談だが

わしの船出に 何か書いてくれんかのおー。

空耳が梅雨空の下で良く聞きとれない。

生者は多分死者に見送られているのだろう。

天地返しの一夜。

舟は出ていったようだ。
ぼくの夜はまだ明けない。

この詩「舟」は、詩集の中でも最も優れた一篇ではないかと私は考えている。癌の手術をした後の治療で意識が朦朧としている深夜にこの詩篇は生まれた。三連目の「存在する物達。物言わず／立ち尽くしたまま／彼岸に渡る舟を待っている。／立ち尽くしたまま／耐えよ！／此岸の万華鏡のような生地獄に。」の緊迫感、生者が此岸から彼岸に向かう時の真実を詩行に宿している。このような存在論的な詩行を生み出すためには、存在することを絶えず問い続けているからこそ可能なのだ。「此岸の万華鏡のような生地獄に。」とは、生きてきた思い出が走馬灯のように想起されて、愛する者たちとの離別の感情が溢れ出てくることなのだろう。しかし遠藤さんはどこまでも淡々と自己の情念を前面に出さずに内奥に秘めながら、他者である先逝く「見知らぬ老人」の声を頼りにこの詩を構成している。その遠藤さんの自己を超えて生者と死者の関係を根源的に問うていく姿勢がこの優れた詩篇を生み出したのだろう。遠藤さんの死を見詰める視線には、死を自己の最も切実な課題と考える時に私の心に沁みてくるだろう。「天地返し」とは、地をひっくり返し天に晒すという農作業の言葉だろうが、生者もまた死者になり天に晒され、いつの日

か生者となつて生き返るといった輪廻のようなイメージを彷彿させてくれる。「天地返しの一夜」とは、その前の行の「生者は多分死者に見送られているのだろう。」でも分かるとおり、彼岸の死者との対話が続く夜のことなのだろう。そう考えるなら、此岸に生きる者とはある意味で「天地返しの一夜」を生き続けている者のことなのだ。それゆえ最終行の「ぼくの夜はまだ明けない。」ことが生を全うすることだと遠藤さんは静かに告げているように思われる。

阿武隈川

この川の名を生涯、何度口ずさむだろう。
この川の流れを堰止める事を夢見て
ぼくは、たぶん、生きて来たのだろう。

かなわぬ願いや祈りを、
涙を集めて流れて行く川のほとりで
ぼくは生まれた。

連れ合い

あの人はいつも笑っていた。
風の日も雨の日も笑っていた。
晴れた日も雪の日も笑っていた。
笑っている人のかたわらに笑えない日が
影を落し数年の月日が流れた。
あの人は明日もまた笑っているだろう。
伴走者である小生は さて
地球がぼっくり割れて
自らの墓穴をのぞき
笑っている人のかたわらでおろおろし
お荷物のまま とりあえず
お先にと。

半世紀の時間を費やし
ぼくが今 発ち帰ろうとする村が
降り積もる雪原の彼方にあり
湖面は張りついていた

その湖面に出現した
屋敷林に包まれた数戸の集落が
夕映えの中にあった。
白夜の国の白い川のほとり
未生以前 その川の流れを知らない。

万年雪を溶かしたひとしずくの人生が
夕映えの中でシルエツトとなり
ぼくの記憶をたぐり 今その出自を
赤芽柳のように産毛を逆立てる。
実在とは張りついた湖面を渡る
疾風のようにすくいがたい。

雪原の下 野面のづらは凍結して動じない。